

〔玉川砂利〕蕎麥の記 日野本郷里正佐藤彦

それ蕎麥はもと麥の類にはあらねど、食料にあつる故に麥といふ事、加古川ならぬ本草綱目には見えたり、されば手うちのめでたき、天河屋の手なみを見せし事、忠臣藏に詳なり、もろこしにては一名を烏麥といひ、そば切を河漏麪といふは、河漏津にあるゆへなりと、片便の説なり、詩經に爾を視るに蕎のごとしといひ、白樂天が蕎花白如雪といひしも、やがてみよ棒くらはせんの花の事なり、大坂の砂場そばは、みせの廣きのみにして、木曾の麻覺は醤油にことをかきたり、一谷のあつもりそばは、熊谷ぶつかけ、平山の平じるもおかし、大江戸のいにしへ、元祿より上つかたは、見頓。蕎麥は淺草にのみありて、むしそばの價七文なりとき、しが今は本町一丁目駿河町にもまちかくありて、御膳百文、二八、二六、船きり、らん切、いも切、卓袱、大名けんどんはいさ亥らず、うば玉の夜たかそば、風鈴に至るまで、何れかみうとのたねにあらざる、高砂の翁そば、鎌倉河岸の東向庵、福山の蕎麥は三階に上る、みの屋のそばは敷初に賑ふ、洲崎のざるそばは深川にきこえ、深大寺そばは近在に名高し、淺草のまきやそばも、大川橋の玄關構にしかず、正直そばの味は、念佛そばの有がたきにいづれ、池の端の無極庵に、周茂叔が蓮をながめ、日暮のとねりやに若殿の駒を繋ぐ、その駒で思ひ出せし瓢箪屋は、麿町の名家なれど、四國町のさる家には及ばざるべし、道光庵も名のみ残りて、稱往院の禁制の、蕎麥門内に入る事をゆるさずもおかしく、小石川のそばきり稻荷も、茗荷屋の茗荷とともにわすれはてぬ。

〔善庵隨筆〕寛文ノ頃ケンドン温飪盛ニ行ハレシユヘ、蕎麥モ温飪ニナラセテ、ケンドンニセシナリ、ケンドントハ俗ニ生質温和ニシテ、財利ニコセツカザル者ヲ、オントウトイフ、オントウト、ウンドンノ音ノ近キヲ以テ、此ウンドンハウンドンナラデ、ケンドンナリトイフ意ニテ、一杯盛切ニシテカハリヲ出サズ、給使モセザルヨリ、ケンドントハイヒシ、コレヲ便利ナリトテ賞翫シ、